



営農情報

「あまおう」1月の管理

第103号 令和2年12月29日

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

1 生育状況

1 番果房は早期作型で収穫終盤、普通作型では二果目～三果目収穫が中心となっています。2 番果房については、12月の出蕾調査では、内葉数が5枚程度であり、昨年と比較すると果房のステージは全体的にやや早くなっています。(図1) また早期作型では、苗が充実不足であったことや定植後に乾燥傾向が続いたことから、早進株率が例年と比較して高くなっています。

ハダニ類の増加やうどんこ病、灰色かび病の発生が見受けられます。特に、ハダニ類は春先にかけて増殖させないように一番果房収穫後に徹底して防除を行いましょう。

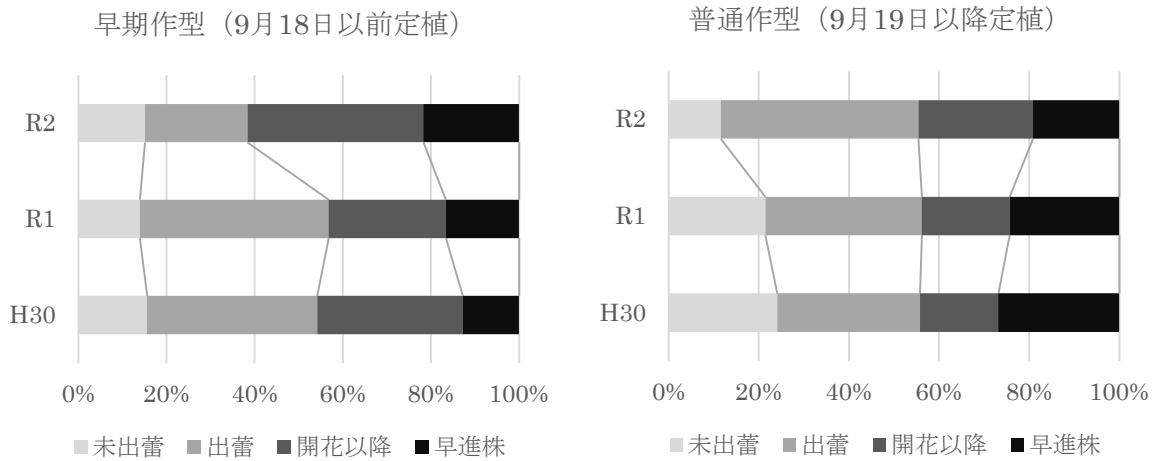


図1 年度別2番果房出蕾状況 (JA福岡大城管内12/9～12/15調査)

2 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区気象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

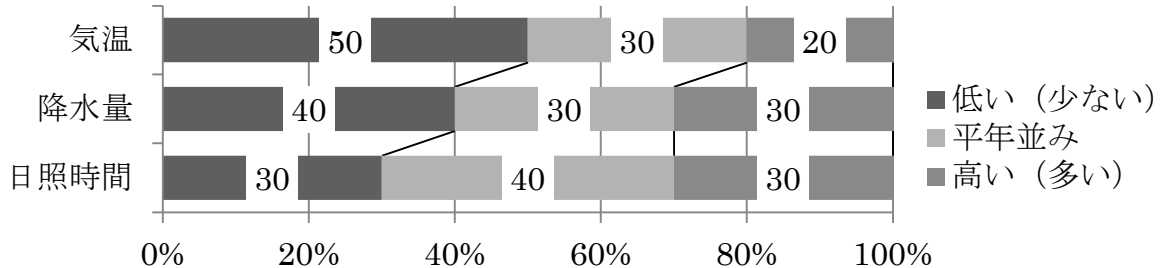


図2 1か月予報 (九州北部地方 予報期間: 12月19日～1月18日 発表日12月17日)

(2) 今後の見通し

1か月予報では、平年より気温が低いまたは平年並みの予報となっています。また、1月は曇りや雨または雪の日が多い予報となっています。温度やかん水管理をこまめに調整しましょう。

3 今後の管理

(1) 温度管理

- ・ 2番果房の収穫開始までは、昼温を高め管理し、心葉の展開や果房生育を促進する。収穫開始後は、昼間の温度をやや下げる。
- ・ 電照時間を延ばしても心葉の伸びが悪い場合や、展葉速度が遅くなった場合は、管理温度を上げる。(設定温度を上げる。午前中は遅めに換気する。夕方早めに閉めこむ等)

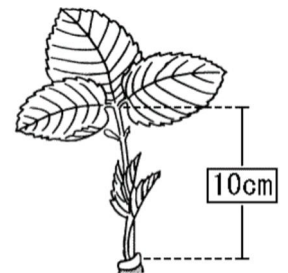
表1 温度管理の目安

生育ステージ	昼間	夜間	備考
1番果房収穫終了後 2番果房出蕾～肥大期	24～28℃	5～7℃	2番果房の生育促進と、3番果房の早期出蕾を目的として高めの管理
2番果房収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの温度管理

※ 寒波が予想される場合はあらかじめ高めの温度設定にしておく

(2) 電照管理

- ・ 年内に株が立ち上がりすぎていても、心葉が低くなっている場合もあるので注意する。
- ・ 電照の効果は1週間～10日後に現れるため、わい化してから電照時間を延長しても手遅れとなる。心葉の展開位置が、外葉より低くなり始めたら、電照時間を延長する。
- ・ 電照時間は、2時間～4時間の範囲で調節する。
- ・ 夜温が高いと、電照効果は高くなる。
- ・ 厳寒期は立ち上がりすぎているようでも、電照を完全に切らないようにする。



心葉展開時の葉柄長10cm

表2 電照時間の調整の目安となる葉柄の長さ

電照時間	時間を延ばす	現状維持	時間を短くする
心葉の葉柄長	9cm未満	9～11cm	11cm以上

<4番花芽分化時期>

【早期作型】 12月下旬～1月上旬

【普通作型】 1月中旬

※ 12月下旬～1月中旬は4番果房の花芽分化時期にあたるので極端な電照延長を避ける。

(3) かん水

- ・ 地温を下げないように、晴天日の午前中にかん水する。
- ・ 暖房機の稼働時間が長くと乾燥しやすくなる。このため、高めの温度で管理する場合は、かん水量を増やし(葉からの蒸散量が増えるため)、こまめなかん水を心がける。
- ・ かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする(朝の葉つゆ状況を適湿状況の目安とする)。

(4) 施肥

- ・液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- ・液肥は、株が弱らないよう定期的に施用する。しかし、株が旺盛な場合は、春先に急激に立ち上げる原因になるため、液肥の施用を減らす。

(5) 草勢維持

- ・2番果房出蕾期や、草勢が弱く株のわい化が予想される場合は、ジベレリンの散布を行う。
- ・成り疲れを軽減するために、発根促進剤（チャンス液・パフォームソイル等）を定期的に施用する。

(6) 株整理

- ・収穫が終了した果梗枝は早めに除去する。果梗枝が残っていると、展葉抑制及び果実キズの発生、果梗枝折れの原因となる。
- ・無駄な養分を使わないように、ランナーやどろ芽は除去する。
- ・枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。
- ・葉陰などで果実に光が当たらないと、黄種果が多くなるため玉出しを行う。
- ・株整理は、収穫量の少ないうちに行っておく。

(7) 摘果

- ・2番果房の摘果は、草勢や果梗の形に応じて行う。

（ 通常果梗：3～5果/枝
かんざし果梗：6～8果/枝 ）

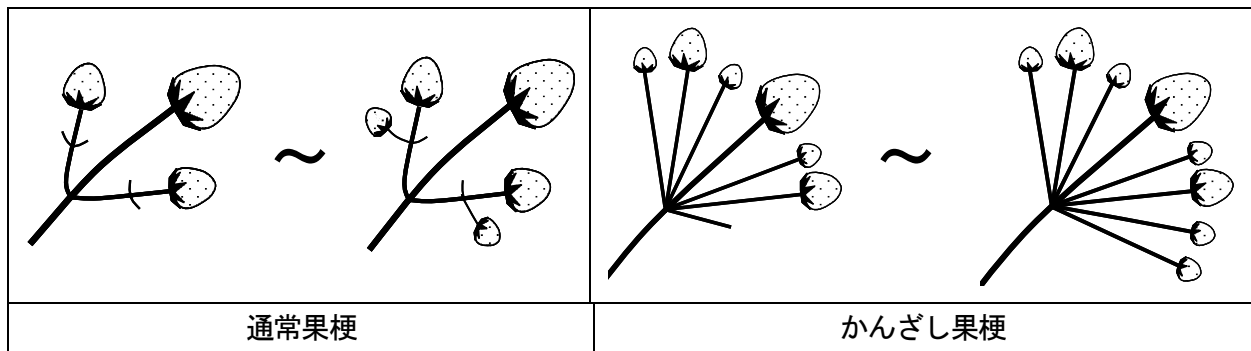


図3 通常果梗とかんざし果梗の摘果のしかた

(8) 病虫害防除

○うどんこ病

- ・湿度80～100%で発生しやすいが、乾燥条件でも発生する。
- ・軟弱徒長した株に発生しやすいので、多発したほ場では昼間をやや低めの温度管理を行う。
- ・発病した葉や果実は、速やかにハウス外に持ち出す。

○灰色かび病・菌核病

- ・今後、本格的に寒くなるにつれ、ハウスを閉めこむことが多くなり、湿度が高くなりやすいため、灰色かび病・菌核病が発生しやすくなる。
- ・湿度が高いと発生しやすいため、できるだけ換気を行う。

- ・曇雨天日などは、暖房機の送風や循環扇を活用し、結露を抑える。
- ・最低夜温が高く暖房機が稼働しないことが予想される日には、設定温度を上げて暖房機を稼働させる。
- ・発病した葉や果実は、速やかにハウス外に持ち出す。

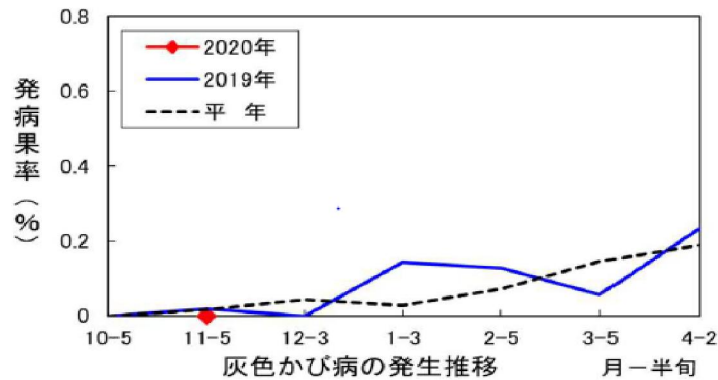


図4 令和2年度 福岡県における灰色かび病発生状況
(12月1日発表、福岡県病害虫防除所調査)

○ハダニ類

- ・ハウス内の出入口付近や谷下など、毎年発生しやすい場所を注意して観察する。
- ・活動の衰える厳寒期に防除を徹底し、2月以降の急増を抑える。(株整理の後が防除に最適)
- ・寄生した葉の除去はすみやかに行き、ほ場内や周辺に放置しない。
- ・チリカブリダニ(天敵)の放飼は、1月中旬～2月上旬に行う。
- ・チリカブリダニ(天敵)を放飼する前に、天敵に影響のない農薬を散布し、必ずハダニ類を徹底防除してからチリカブリダニ(天敵)を導入する。

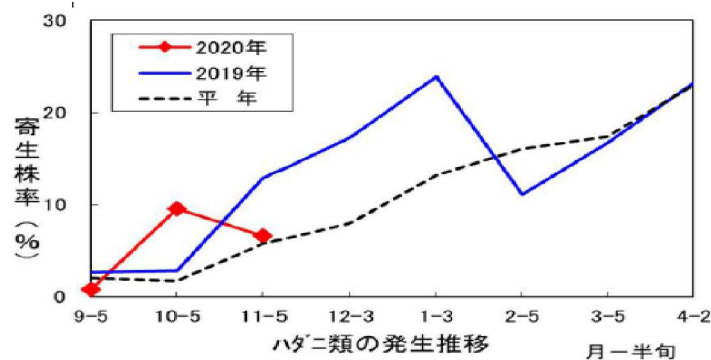


図5 令和2年度福岡県内におけるハダニ類発生状況
(12月1日発表、福岡県病害虫防除所調査)

(9) ミツバチ管理 ～元気に働いてもらうために～

- ・農薬散布する場合はミツバチに影響がある日数は巣箱をハウス外に出し、危害が出ないように注意する。
- ・影響のない農薬を使用する場合でも、ミツバチは薬液が乾いてから活動させる。
- ・巣箱を戻す際は、ミツバチに対する安全日数を確認のうえ、必ず元の場所に置く。
- ・厳寒期に低温や曇雨天日が続く場合は、クロマルハナバチの導入も検討する。

特集①「薬剤のかかり方を確認し、ハダニ類防除を徹底しましょう」

今作では、定植後にハダニ類が多発したほ場が多く見られました。ハダニ類が多発した理由として、①降水量が少なく乾燥傾向で推移したこと、②薬剤の効果が低下していることが挙げられます。②薬剤の効果が低下に関しては、薬剤感受性が低下していることに加え、薬剤が葉裏にまでしっかりとかかっていないことが要因として考えられます。

下記に平成28年度にみやま市で実施した「噴口や散布方法等の違いによるイチゴ株葉裏への薬剤のかかり方の確認試験」の概要を記載しています。こちらを参考に、“薬剤がかかっているか”を意識しながら防除を行いましょう。

<噴口の違いによる濡れ程度の比較>

① すずらん (10頭口)



…株の外側（溝側）の濡れ程度は良いが、内側の濡れ程度にはムラが出やすい

② 広角すずらん (4頭口)



…全体的にムラが見られ、ほとんど濡れていない箇所もみられる

④ 茶噴口 (7頭口)



…局所的に濡れ程度が良い箇所もあるが、全体的にムラがみられる

③ 静電噴口



…全体的にムラが見られ、ほとんど濡れていない箇所もみられる

⑥ イチゴセイバーノズル



…ムラなくほぼ均一に濡れる

⑤ 二股噴口



…ムラなくほぼ均一に濡れる

噴口によって薬剤のかかり方は大きく異なっており、散布ムラや薬剤がかかっていない場合もあります。この時期は葉数が増え、さらに薬剤がかかりにくくなるため、葉裏にしっかりかけることを意識して防除をしましょう。ただし、花に薬液が当たると花粉稔性に影響が出る恐れもあるため、開花期の防除には十分注意しましょう。

特集②「イチゴの獣害被害を防止しましょう」

タヌキ等の獣害による果実の被害が見受けられます。また、イチゴ果実への直接の被害はないものの、モグラやカラスなどの痕跡もハウス内外で見受けられます。獣害の被害が見られた場合は、痕跡をしっかりと確認し、対策を行いましょう。また、ハウス周辺的环境管理に心がけましよう。

モグラ・カラスの特徴

○モグラ

- 地中深さ30cmから1mにトンネルを掘り、その中で生活する。
- トンネルは本道と側道があり、本道は巣から採食場へ行く通路となる。
- 足で踏みつぶしても、数日以内にトンネルが復元されていたら本道であると考えられる。
- 肉食性であり、直接農作物を食べることはないが、採餌のためにトンネルを掘ることにより、作物の根を切ってしおれさせることがある。
- ハウス周辺に侵入防止用の柵を設置するなど、事前対策が重要となる。

○カラス

- 雑食性であり、幅広い食性を持つ。
- ほ場付近に生ごみなどがあるとカラス類を誘因することがあるため、ハウス周辺への廃棄を避けるなど、適切な処理を行う。
- プランター内のIB化成などをついばんで動かす、散らかすといった行動をとる。
- 上空からだけでなく、歩いて侵入することもあるため、側面からの侵入も注意する。
- 防鳥ネットの設置やテグスを1m程度の間隔で張ることで侵入を防ぐ。

イチゴを加害する獣害の特徴

○タヌキ

- 4本指で犬に似た足跡になり、指先に爪の跡がつくことが多い。
- 前足、後足ともに足跡は長さ4cm、幅3cm程度。



図6 タヌキの足跡

○イタチ

- 5本指の足跡。アナグマに似ているが、アナグマよりも小さい。
- しなやかで細長い胴体に短い四肢をもつ。



図7 イタチの足跡

○アナグマ

- 鋭い爪が目立ち、5本指で指が短い。
- 前足の足跡は長さ5.5cm、幅6cm程度。
後足の足跡は長さ6.5～8cm、幅5～6.5cm程度。



図8 アナグマの足跡

(農林水産省 野生鳥獣被害防止マニュアル及び鳥獣被害防止対策支援研修資料より抜粋)

「慣れ」と「油断」が事故を招きます
「安全」な農作業と農薬使用を徹底しましょう！